

パワーストーン

おおぎやなぎちか



あたしには、八歳さいのときまで、お姉ちゃんがいた。

ママの妹が同じ家に住んでいて、あたしは叔母おばであるその人を、「お姉ちゃん」と呼よんでいたのだ。

お姉ちゃんは、ママが中学生のときに生まれたのだという。そして、あたしは、お姉ちゃんが十歳さいのときに生まれた。

十歳さいのお姉ちゃんは、赤ちゃんだったあたしのおむつを替かえ、ミルクを飲まませてくれた。

っていうのは、記憶きおくにはない。写真はあるけどね。

中学生のお姉ちゃんは、絵本を読んでくれて、いっしょに留守番るすばんもした。

これは、少し覚えてる。

高校生のお姉ちゃんは、アニソンが好きで、すごく上手だった。あたしも、いっしょにおどりながら、歌った。

これは、もちろん覚えてる。最高に楽しかった。

姉妹がいる友だちはたくさんいたけど、あたしのように「大きな」お姉ちゃんが

いる子はいなかった。自慢じまんだった。
大好きだった。

でも、お姉ちゃんは高校卒業と同時に家を出ていってしまった。アパレルショップの店員になって、ひとりぐらしをはじめたのだ。

最初のうちは休みの日にケーキを買って遊びにきたりしてたけど、だんだんその間隔かんかくがあいて、去年からは一度も来てない。

あたしは今、ひとりっ子の五年生だ。

一 お姉ちゃんが来た

梅雨が明けた。なのに、あたしの気分は、どんより。じめじめ。

家でアイスでも食べてすっきりしようと思しながら、学校から帰ってきた。

ところが、ドアを開けようとしたら、鍵かぎがかかっている。ママは地元ゆめんの郵便局ゆうびんに勤めていて、まだ仕事のはず。具合が悪くて帰ってきてるとか？

……まさか、どろぼう？

と身をかたくして、げんかんに入る。すると……、リビングのドアが開き、その人があらわれた。

「おっ、瞳ひとみ。おかえり〜」

「だれ?!」

「お姉ちゃんでしょう。ひさしぶりっ」

「あたしはひとりっ子ですが」

抱だきついてこようとするその人をさけて、リビングへ。がちり、エアコンが効きいていて、涼すずしい。

「つれないなあ」

無地Tシャツに、どこかの量販店りょうはんてんで売うってる柄がらつきステコをはいたその人が、あとから入ってきて、ごろりとソファに寝ねころぶ。髪の毛はボサボサ。金髪きんぱつに染そめるところと、頭かぶのてっぺんに黒く伸びたところがある。なさけないプリン頭だ。冷凍庫れいとうこを開けたけど、夕べはあったアイスがない。